

第 3 学 年 道 徳 学 習 指 導 案

日 時 平成 18 年 9 月 27 日 (水)

対 象 3 年 6 組(男子 19 名 女子 16 名 計 35 名)

場 所 3 年 6 組教室

授業者 教諭 渡邊 康二

- 1 主題名 生きる力
- 2 指導内容項目 「生命の尊重」【3 - (2)】
- 3 資料名 あなたはすごい力で生まれてきた (出典 明日をひらく 東京書籍)
- 4 主題設定の理由

(1) 価値について

指導内容項目 3 - (2) は、「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」ことを目指すものである。

中学生の時期には、健康に毎日が過ごせるためか自己の生命に対するありがたみを感じている生徒は決して多いとは言えない。身近な人の死に接したり、生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験を持つことも少なくなっている。そのためか、生命軽視の軽はずみな言動につながり、社会的な問題となることもある。

そのような中学生にとって、自己の生命への尊厳、尊さを深く考えることが大切である。生きていることのありがたさに深く思いを寄せることは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に答えようとする心の現れといえるからである。

そのために、生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重することを指導することは大切と考え、この主題を設定した。

(2) 生徒の実態について

本学級生徒は、大変明るく、素直に反応をする生徒が多い。授業での発言も多く、道徳の授業のなかでも自分の考えを精一杯表現しようとする姿勢が見られる。学級目標も「One for All All for One」と定め、他人を尊重することが自分を大切にすることの繰り返し指導してきた。その結果、これまで行われた数々の行事でも、他人との関わりを大切にし、自己の存在意義を自覚し、帰属感と自己肯定感を持ちながら活動していこうとする雰囲気が出てきていると考える。

しかし、こうした望ましい雰囲気の中にあっても、ふとした日常生活のなかでは、口癖のように生命軽視の言動を口にしたり、進路や交遊関係の悩みから自暴自棄になり、軽はずみな行動をとる姿も見られる。また、校内でとったアンケートでは、「家族に大切にされている」と考える生徒は約 5 割、「自分自身を好き」と考える生徒は約 1 割となっている。

このような学級の生徒が、自己の生命への尊厳、尊さを深く考えることは、生きていることのありがたさに深く思いを寄せ、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に答えようとする心が育まれ、本学級をより良い学級にしていくものと考え、本時を設定した。

(3) 資料について

出産をテーマにした随筆文であり、感動資料である。自分の力で精一杯生まれ出てきたこと、さらに母親の命をも支え、互いの命をそれぞれ生かし合っている姿を確認させてくれるものであ

る。生き物に備わった力そのものを自覚することによって、普段の生活のなかで生きる力を失いそうになった場合でも、生き続けていこうとする勇気を与えてくれる、まさに「生きる原点」を自覚させてくれる資料である。

(4) 指導にあたって

指導にあたっては、「生まれるということ」の価値を資料のなかから感じ取らせたい。

そのために、題名にもある「すごい力」について、それがどのような力なのか、「母親」「赤んぼう」の両面からとらえさせ、出産というものは、母親だけの現象ではなく、生まれ出たいという赤んぼうの意志が働いているのだということをとらえさせたい。また、資料での話し合いを補充するために、地域講師として岩手県立大学看護学部の学生から看護実習での体験を語ってもらい、出産の感動をより身近なものとしてとらえさせ、「生まれるということ」の価値に迫りたい。

後半には、事前に書いていただいた保護者から生徒に宛てた手紙を読ませ、自分自身も、資料の中に出てきた「赤んぼう」と同様、かけがえのない存在であり、生まれるべくして生まれてきた存在であることを理解させたい。そして、授業のまとめとして、保護者に宛てた感想を書かせることで、本時の価値の迫っていきたい。

5 研究主題との関わり

本校生徒は、これまでの校内研究の実践により、望ましい生と性について考える機会を得てきた。3学年になり、道徳の「生命尊重」の授業をはじめ、総合的な学習の時間では、ピュアエデュケーション「自分も大切に、相手も大切に」といった演習、他教科での性に関する授業、また、1年時には助産師、2年時には産婦人科医の講演など、生命の尊さふれ、かけがえのない自他の生命を尊重することの大切さを考える機会に出会っている。

本時のねらいである「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする心情を養う」は、本校研究主題「生命を尊重し、より良い生き方を考える生徒を育てる指導のあり方～望ましい生と性の指導の実践をとおして～」の仮説「自己肯定感を育てる意義」に位置づけられるものであると考える。

6 本時について

(1) 本時の目標

生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする心情を養う。

(2) 本時の展開

	学 習 内 容	予想される生徒の心の動き	指導上の留意点
導 入 8 分	地域講師の紹介 日常生活を想起する。 ・自分が生まれたときのエピソードを聞かせてください。 課題の確認		・岩手県立大学看護学部4年郡司美樹さんの紹介 ・生徒には、事前に聞いてくるように話しておく。 ・家庭環境には注意する。 ・「生まれるということ」と板書し学習の方向付けをはかる。
	「生まれるということ」という意味について考えてみよう		
	資料を読む。(範読) 心に残ったことを話し合う。		

展	<ul style="list-style-type: none"> ・どこが心に残っただろう。そしてその理由は？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・出産は赤んぼうにとっても命がけなのだとこのころが心に残った。母親が大変なのだと聞いたことがあったが、赤ちゃんも命がけで生まれてくるのだとは知らなかった。 ・生まれてくる赤ちゃんに「生まれよう」という意志があるのだと言うことは考えたことがなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・心に残ったのはどこかなぜそこが心に残ったのかを中心に発表させる。
開	<p>「すごい力」について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤んぼうが生まれるため、生きていくための「すごい力」とは、どんな力のことだろう。 	<p>「母親(母胎)」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いきみ」という現象が起こること。赤んぼうを励まそうという動作が起きていること。 「赤んぼう」 ・母親の体が疲れ切ってしまうように、少しずつ、呼吸を計りながら、動いたりとまったりして、外の世界へ安全に出ようとする事。 ・母親の乳房に吸い付く勢い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の価値へ迫る話し合いとしたい。 ・「母親」「赤んぼう」の両面から迫る。 ・「生まれるべくして生まれ、生まれえなかったたくさんの命の代表として今を生きる」の文を押さえる。
25分	<p>地域講師から話を聞く。(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郡司さんが出産に立ち会ったときの話を話してもらいましょう。 <p>本時の資料の話し合いおよび地域講師の講話について感じたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生まれるということ」についてどんなことを感じましたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大変な作業を乗り越えて生まれてきた命は、とてもかけがえのないものであると感じた。 ・命というものは、生まれたくても生まれてくることができなかったものがあるのだと思えば、今ある自分の命を大切にしていかななくてはならないと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出産に立ち会った経験を話してもらおう。 ・『生まれえなかった命』についてもふれる。
終末 17分	<p>地域講師から、今日の感想を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郡司さんから、今日の感想を話してもらいます。 <p>保護者からの手紙を紹介する。</p> <p>今日の感想を含めて、保護者へ手紙を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の授業を通して考えたことを、お家の人へ手紙にして伝えよう。 	<p>自分は今まで勝手に生まれてきたと考えていた。命は大切だと考えてはいたが、今日の授業を通じて、それが他人事ではなく、自分の命もこのような過程を通じて生まれてきたこと、周りのだれもが、そのようなかけがえのない命なのだとすることをあらためて感じる事ができた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生に対するメッセージをいただく。 ・事前に書いてもらったものを配る。